

不使勝食氣陸德明釋文曰氣如字說文作既云小食也邢炳疏曰氣小食也說文長箋曰正飯之後有小飯如茶點之類北方謂之小食飯之餘也

〔守貞漫稿後集食類一〕飯

又京坂ハ未刻比ニ八ツ茶ト號ケテ所謂點心ヲ食ス蓋短日ニハ不食之永日ノ比ハ專ヲ食之多クハ茶漬飯ヲ食スモアリ江戸ニハ三時ノ外ニ例トシテ食スコト無之

〔食物服用之卷〕七ツてんしんの事

一 一ばんにさうけい、二ばんに水のこ、三ばんにやうかん、四ばんにうどん、五ばんにまんぢう、六ばんにきりむぎ、七ばんにむしむぎ、

右これをいふ也、常の御祝言のときはなきもの也、千部の經又はとんしやなどの時の事也、

〔宗五大草紙上〕人の相伴する事

一點心の事、朝に參候を申候、ひる參をまんかんなど申由候、一獻などの時分何時も參候へ、公方様などにては御點心と申、朝點心と云事はきかず候、

一點心の時參様、是は禪僧作善などの時の事なり、先朝に茶をひかれ候、さて饅頭出候、それにむしむぎを引候へば、饅頭はめしわんに入候、武家にては作善の時同前、饅頭のくひやう、一取てをしわりて、なからをば殘たるまんぢうの上にをきながらをくふべし、さて殘たるをもくひたくばくふべし、くるしからず候、年寄たる人は、尤ながらもくふべし、又も二もくふべし、又作善の時は僧達はさばの心にて、ちとちぎりて、右のさらに取置候、いづれも點心同然に候、むしむぎは、あげざまにわんへ入られ候、又いにしへは椀にまんぢう四入候様に覺候、三ならべてわんニ入、ひとつ上に置たると覺候、定て覺違にて可有候、又饅頭の參時は、茶をひかれ候間、糲さうけいは不出候か、慥に不覺候、